

ドン・ジュアンに観るバイロン像(3)

楠 本 哲 夫

〈疲れた男が洞窟に入るとき〉

1817年2月2日、ヴェニスから ジョン マレーに宛てた手紙の中で バイロンは はっきりと 次のように述べている。

「詩とは僕の場合、僕の中に眠っている情熱の夢なのである」と。そしてさらに

「韻文を捨て イタリアの風俗習慣 及び人間的情熱を描きながら 散文の形態で 幻想的作品を探り求めゆくことになるかもしれぬ。」と 祖国英国追放後の 流謫の心境を伝えている。

だが その〈情熱〉は眠っていても 死んではない。そして バイロンが その中で生きている〈夢〉は 典型的型態で 豊かに 泉の如く 次々に詩情となって 溢れ湧き出てくるのである。

このことは≪ドン ジュアン≫の 第一篇で 明らかに 謳はれている。

I want a hero: an uncommon want
When every year and month sends forth a new one,
Till, after cloying the gazettes with cant,
The age discovers he is not the true one;

Of such as these I should not care to vaunt,
 I'll therefore take our ancient friend Don Juan —
 We all have seen him, in the pantomime,
 Sent to the Devil somewhat ere his time. (I, i)

主人公に事欠くなんて	そんなの妙な話だ
だって、毎年 毎月	新しい主人公 ^{ヒーロー} が生れては
虚飾 空念佛で	新聞を賑わすのだから
だが奴等はイカサマと	時が経てば露見する
そんな手合いの行状を	吹聴したくはない
だから選ぼう、主人公に	昔馴染のドン ジュアンを
^{バントマイム} 無言劇で彼のことなら	誰もが知っているからね
天壽 ^{まつと} を完うする前に	悪魔の餌食になった男さ

バイロンは ここイタリアの地で異った多角的詩作を意欲的に試みている。

一面では＜image-making＞（イメージ 作り）——《The Vision of Judgement》*（審判の夢）の作品の中で サウジーに演らせた役割の如き——への野望は すべて否認し放棄した。そして このことは 我々読者にむかって＜image-breaking＞（イメージ破壊） という とても重要な役割を果たす心構えを お膳立してくれた。

注

バイロン作。1822年10月15日 リベラル誌 発表。黒い喪服を纏^{まと}うて憂愁な影を曳く チャイルド ハロルド 卿が 1812年3月24才にして英国詩界に華々しくデビュー以来、読者の憧れた バイロン像、トレード マーク としての、偶像的 Byronic image だった。つまり、読者は次々と繰出されるバイロン作品がこのイメージで謳い継がれるのを待ち焦がれた。浪漫派の彗星として騒がれた若き日のバイロンはしかし自分の詩風に行詰って＜古い衣＞ 今は、自らにとって 古くなったと 考えられた ＜その衣＞を 脱ぎすてて ここ、イタリアの流謫の地で

詩風を、つまり、自らの詩境を必死の思いで 転換しようと 考え、苦しんでいた。心の中に 眠り潜んでいた<夢>——諷刺精神——が<Beppo> の作品において見事に 開花して 諷刺詩人としての第一歩を踏出したのである。

もっとも その諷刺詩人としての芽生えは若き日、ケンブリジ大学在学中に 書いた、あの英国詩園を揺り動かした嵐<English Bards and Scotch Reviewers> (英国詩人と スコットランドの批評家達へ) の中にその片鱗が 十二分に うかがえ、その頃より、深く心奥に巣喰い 眠り続けていたものだが。

かくして ^{ロバート} Robert Southy —時の桂冠詩人— が<A vision of Judgement> (1821年4月21日) の中で バイロンを<悪魔派> Satanic School と呼び捨て<英国詩界の伝統を汚すもの> と 罵倒したことに対し、Byron が ^{ある審判の夢} この同じ詩題 <The Vision of Judgement>で ^{サウジ} サウジーを<組上の鯉>の如く ^{もてあそ} 弄び、なぶり 手玉にとり<道化師>の役を見事に演じさせ 愚弄した。この間の事情をいうのである。

バイロンが image-breaking (イメージ破壊) を志向したとき バイロンの心に眠り潜んでいる<夢>として、cant (偽善的空念佛) を打破 粉碎しようとする反逆精神が直ちに抬頭し活気づいてくるのであるが この意識こそ 実に<ドン ジュアン>の作品 の諷刺的影響力、その底流として厳存するバイロンの強力な詩精神であり、且つこの語<cant>がこの作品中の最も重要な Key word となっている。

しかし 夢中歩行的深層面で バイロンは<われらの昔なじみの友> 人生の夢 という無言劇の中を動いてゆく人物 ドン ジュアンを投出し 映してゆくのである。

我々が この<われらが昔馴染の友> という文句を聞くと、私達の心はチャイルド ハロルド 第三篇の中の、あの無比無類の明確さをもって バイロンの創作的芸術行為、バイロン詩について、みずからの詩観、人生観を述べ、奥深い彼の心を漏らしているのを 垣間見て 今更の如く 深い感銘を覚えるのである。

He, who grown aged in this world of woe,
 In deeds, not years, piercing the depths of life,
 So that no wonder waits him—nor below
 Can Love or Sorrow, Fame, Ambition, Strife,
 Cut to his heart again with the ween knife
 Of silent, sharp endurance—he can tell
 Why Thought seeks refuge in lone caves, yet rife
 With airy images, and shapes which dwell
 Still unimpaired, though old, in the Soul's haunted cell.

'Tis to create, and in creating live
 A being more intense, that we endow
 With form our fancy, gaining as we give
 The life we image, even as I do now.
 What am I? Nothing: but not so art thou,
 Soul of my thought! with whom I traverse earth,
 Invisible but gazing, as I glow
 Mixed with thy spirit, blended with thy birth,
 And feeling still with thee in my crushed feelings' dearth.

(CH III, v-vi)

うつしよ 憂世の生命の深き	と 尋め行き
才月ならぬ 煩悶に	老いしもの
驚異は もはや	起り得ぬ
愛と哀、誉れと希望 のぞみ	争とても 今はなく
堅き、鋭き 刃とても	胸を切り裂く能わず
彼は 今知る	なにゆえ 思想は
淋しき 洞窟に	隠所を求めるのか

そこに 充つるは	多くの 幻と形
古くも 傷われず	霊室に 宿る

創るため 作りて	深き生を生くため
人は 幻想に	形態を与え
われ 今 ここに	なす如く
その形態に	われ 思う
いのち 生命を与えつ	その生命を ^あ 吾も分つ
我とは何 空のみ	されど汝は空ならず
思想の ^{たま} 靈魂よ、空ならず	うつつよ 現世と共に汝は翔け
かくれみの 隠蓑纏うも我は見る	汝が精に溶けゆく私の
炎えつつ生くるを	ひしがれ飢えし心の中も

(CHilde Harola III, v-vi)

‘Our ancient friend... shapes unimpaired, though old...’

これら幻想一魂の在所（霊室）、無意識の世界の最も内奥、深所に住む——これらの諸の形態こそ、バイロンが力強く訴えるとき、必ずこれを拠り処にしたバイロンの原型力なのであった。

「バイロンは詩人であった。だが哲学者ではなかった。バイロンは哲学者にはなり得なかった。哲学者として、自らの詩観、人生観を理論づける、そして体系づける暇がなかったからである。バイロンには、不断に湧き出る新しい、より強力な感情が激発し、瞬間、瞬間が活火山の噴火口から、ふき出す噴煙となり、どろどろとした溶岩流となって流出していったから。」

というバイロンへの批評があるのは、いかにも、その意味において、真実である。だがしかし——

バイロンが 詩人であり、哲学者であったことも また 真実である。 即ち
 バイロンは 行動詩人、投影詩人として その生涯の瞬間 瞬間の軌跡を
 あますところなく、矢継ぎ早やにうたい続けた詩作品として遺しその万巻の詩
 集を通して バイロン哲学として一貫した、バイロン 独自の人生観 哲学を
 無比無類のものとして 不滅ならしめていることを否定することはできない。

＜詩とは 人生批評であり 社会批評である＞とバイロンは 断言する。 そ
 の意味においてバイロンは哲学者であり ≪ドン ジュアン≫は バイロンの
 人生観、世界観の集大成として、その 諷刺精神が千古不滅に光り輝き続ける
 ことであろう。 そして これが＜真実の生＞だと語り続けるであろう。 凡
 そ すべての poet にして——minor poet は除外するとして——philosopher
 ならざるものはないと 確信してよいのではないだろうか？

とにも角には ≪ドン ジュアン≫には、詩情豊にして かつ その、現実
 諷刺の詩精神の中に＜多くの真実＞が 示唆されている。

‘Our ancient friend... shapes unimpaired, though old...’ と唄ったとき
 ＜これらの幻想＞こそ バイロンが 心の内奥に秘蔵する dream ＜夢＞の
 人物群像を構成しているのである。 ≪Childe Harold≫ ≪Manfred≫ ≪The
 Dream≫ ≪The Vision of Minerva≫の中で ＜夢＞ が 神話的 象徴的
 展望の間で活躍しており、 且つ そのヒーローは、いつでも 突然現れる
 複雑な人物なのである。

≪ドン ジュアン≫の中では＜象徴＞ が 寓意物語へと制限され、歴史の流
 れと威大なる時代に及ぶ神話的なものが＜バイロン自身の 個人的贈物＞ per-
 sonal present となっている。 ≪チャイルド≫の 多面にわたる複雑性が
 積み重ねられ 二つに分割された人格として≪ドン≫の二面性へと整理され要
 約されている。

さらに バイロンが魂を付与され、生を享け大地をわたりゆくのは もはや彼のヒーローと手を携えてではなく＜完成された人形師＞として指揮し操縦してゆくのである。

＜ドン・ジュアン＞の読者はすべて ジュアンの不思議なヘビ神によって蘇生した無言無意識的性格を感じたにちがいない。即ちそれは《イズメールの攻囲戦》における如き危機においてすらある機械的行為（無意識的自動作用）の特色、風趣を付与する夢中歩行的性格なのである。

《チャイルド・ハロルド》の第三篇は 1816年5月初旬に執筆し始め 6月下旬か7月上旬頃に書き了えている。この冒頭の節の中で バイロンの幼き日のことが直ちに飛び出してくる。この幼少時代において、バイロンにとって＜生きること＞は もはや新しい希望に充ち溢れたものではないのである。

‘No wonder waits him...’

……驚異は もはや 起り得ぬ……

バイロンにとって ソクラテス哲学的 ^{タウマゼイン}thaumazein（驚異）は、極限にまで 生きることの苦しさ能耐えぬいてきた幼少期、既に厳しい 無情な＜生の深奥＞の中で 既に 喪失されてしまったのである。＜驚異＞は もはやいささかも 起り得ない状態になっていたのである。だから 疲れ切った者として洞窟の中に憩いたいと切に願うのである。その隠所こそ 多くの幻と形が、古くとも 傷われず、霊室に宿る ことを 彼は知っているから。

バイロンは archetypes＜祖型＞—祖先から受け継いだ無意識心理の型 に支えてもらおうべく投げ出され 無意識の力の刺激を抛り処として頼るのである。

かくして《ドン ジュアン》は 以前の作品のどれよりも 遙かに よりリアリスティックな、より人間臭のふんぷんとする、より現実の生活に近い、だがしかし、—— 事実は、現実的な点では 微妙な、韻律の変化に富む、これまでの作品の凡てにとって代るパラドックスを示している。

《ドン ジュアン》は、《チャイルド ハロルド》（第三篇）の完成の2年後に かき始めて以来、—— D.J. (Canto III) の中で、或いはスイス時代の手紙の中で そのように鮮明に暴露し 述べているのだが—— 苦難と挫折感、無気力状態に近い危機という 生みの苦しみに喘いだ 最終作品（絶筆）なのである。

ドン・ジュアンの作品を別の角度より述べるとすれば チャイルド・ハロルド の〈裏返し〉〈逆〉と言ってよいだろう。^{オリジナル} 原型の チャイルド は 一人の皮肉屋 冷笑家 絶望的放蕩者として ニューステッドから 漫遊の旅に出て みずからを除々に取戻し 覚醒し その自覚が募りゆき そして 古代芸術と文明の解放された〈悠久の自然〉に曝されることにより、彼は〈驚異の念〉にうたれ、生と死の神秘、新しい純潔 を洞察する境地へとたどり着くのである。

この心境はすべて Childe Harold (C I. II) において はっきりと うかがうことができる。祖国での妻アナベラとの離別 そして追放の^{ドラマ}悲劇は Childe Harold (C III) の冒頭の節の中で、バイロンをみずからの姿に押し戻している。そしてそこでは幻滅の種子がまかされている。しかし スイスとイタリアの豊かな土壌が育んだ影響感化の中で たっぷり その雰囲気^{大自然}にひたり、生き残り、活気づいてゆきながら C III, VI, を通じて チャイルドの教化は多くの複雑な詩行に脈打ち続ける相を 我々は感知することができるのである。〈チャイルド・ハロルド〉が 全ての巡礼の旅を終わるに当って、大海原にむかって投げかけた、あの荘厳にして華麗な呼びかけは 又もや彼を the Mothers との創造的接触へと呼び戻し 読者をして 新しい可能性への心踊る歓喜の感覚

にひたらせてくれるのである。

《ドン・ジュアン》の場合は——チャイルド・ハロルドの遍歴と逆行して——純真無垢の世界から出発するのである。もっとも、それは動物[・]的純潔、無垢からの出発なのであり次第に皮肉主義と墮落、遊蕩へと悪化してゆくのである。

ドン・ジュアンの地理的遍歴は 南方——セビル（セビーリヤ）そしてハイデ[・]ィのエーゲ海の島——から北方——セント・ペテルスブルグそして^{ノルマン}‘Norman Abbey’——までなのであり、一方 《チャイルド・ハロルドの巡礼記》は ニューステッド そして ロンドンから南方への旅であった。

この相違は重要である。バイロンにとって——ブレイクにとっても そうであった如く——＜南国＞と＜北国＞ は、つまり、＜温暖と寒冷＞は＜善と悪＞ とほとんど同義だった ということである。

あの场景——1802年、グランド ツアーの途中、スペイン、セビーリヤに立ちより、日射し豊かな南国の情緒を心ゆくまで満喫した歎びを、故国の母、そして友人達に宛てた手紙の中で 鮮明に描いている—— は、バイロン自身の経験として チャイルド・ハロルド（第一篇）の中で 見事に くっきりと設定されている。 このように バイロンは南国と最初に相遭したのであった。

その南国とのふれあいに、バイロンが生い育った北国スコットランドの陰影の濃い幼少時代 そして苦悩する青春の暴走より解放され心が、かくして《巡礼記》の詩行に 特色ある流麗な筆致で ‘oranges and women’ として 謳^{うた}いこまれてゆくのである。

バイロンと琴瑟 相和した詩聖ゲーテが、初めて 南国イタリアの地を踏んだとき、

ああ イタリアよ イタリアよ
 かんらん 柑欖の花咲く イタリアよ

と 柑欖の花咲く南国イタリアを、北国育ち故にこそ、讃嘆し 絶句した 陶酔の心境と全く同一である。 かくして バイロンの心はゲーテに通い ゲーテの心は バイロンに通ったのである。《ファウスト》は 《ドン・ジュアン》と 断絶し得ない契り^{ちぎ}を結んだのである。 ‘Satanic School’ 悪魔派 バイロンは ドン・ジュアンにおいて 豪華絢爛と花咲いたのである。 60年の才月を経て 完成されたゲーテの《ファウスト》の中で 第二部において、彼ゲーテは バイロンを、ファウスト（ロマンチズム）と ギリシヤの美女 ヘレン（クラシズム）の愛し児としてユーフォリアン と命名し バイロンの為に記念像を打ち建てたのである。 それがバイロン文学の本質であり 総決算であり、具現化である と 明言した ゲーテの《ドン・ジュアン》 への高い評価を不動のものとしている。

さて、ここにバイロンが詩った ‘oranges’ は、チャイルド・ハロルド 第一篇 で くり返し くり返し 訴え続けた <自然の恵み>を意味し、そして ‘women’ は ドン・ジュアンの中で 今日 女性に与えられるべき <充分な処遇>としての<愛>の課題を示唆したものである。

<疲れた男が洞窟に入るとき> は

人は何のために生きるのか？ という 人生最大の課題に みずから 答えて <人は土と化するためにのみ 生きる> のであると直言した バイロンが、短かった36才の生涯を ひたすら みずからの<夢>^{ロマン}を追い続け、その瞬間瞬間^{ほのお}の炎をもやし続け 消ゆる、もえつきる生命のきわみ <疲れ切った一人の男>として<ああ 我 生きたり>と 一言 ポツリ と洩らした<ドン・ジュアン> バイロンの 感懐 なのである。

‘The Sexual Garment Sweet’

＜甘美なる 女性愛の衣^{ころも}＞

ドン・ジュアン は 英国長詩の中で 女性の美しい姿を展示した すばらしい一大画廊として最も顕著なものである。この点でドン・ジュアンに比肩し得るものとしては、唯一 シェクスピアの作品の全集績を挙げることができるだろう。

ブラックウッド 誌が ドン・ジュアンを評して ＜バイロンは この詩の中で 女性をぞんざいに 粗っぽく 扱っている＞ と攻撃したことに對して バイロンは 当意即妙に應えて言った。

「いかにも そのとおりかもしれぬ、だがしかし、私はこれまで 女性への殉教者として ずっと生きてきたんだよ。私の全生涯は 女性の為^{ため}に捧げられ、女性の犠牲となってきたんだ」と。

バイロンの、この応答、つまり、ブラックウッド誌の酷評を正直に肯定した。

そのような一人のすばらしく器用な男の見事な手練によってこの＜ドン・ジュアン画廊＞では、それぞれの女性が どれも すばらしい展示品として詳細^{てまか}に 系統的に きちんと 並べられているのである。

バイロンが＜ブラックウッド＞誌の酷評に應えたこの当意即妙なことばの如く彼の描写には 自叙伝的要素が強くしみこんでいる。つまり バイロンは ^{ドナ イネス} Donna Inez* のポートレートを描くにあたって バイロンの妻 アナベラを思い出している。

(注)

ドン・ジュアンの母。 学識豊かな淑女で あらゆる部門で学問に秀れ、特に数

学を得意とし、ラテン語、フランス語、ヘブライ語、ギリシヤ語にも長じ、キリスト教国では既に名をうたわれていた。

そして《巡礼記》の中に写し出されたスペインの乙女達が《ドン・ジュアン》
第一篇の中の ^{ドナ ジュリア} Donna Julia* の詳細な考察のモデルとなっている。

(注)

ドン・ジュアンの母 ドナ・イネスの親友で 少年ジュアンと 相愛の仲となり、
不倫の恋の噂がたち そのため ジュアンは 他国へ旅立たねばならず、慕情 は
募りゆき 仲を割かれ 悲恋に泣く

そして 又 一方、第二篇、第三篇の中の ^{ハイディー} Haidee* は アテネの乙女達の追
憶、

(注)

ジュアンの乗った船が 嵐にあい、難破し ギリシアの島に漂着したが それは
海賊島で その海賊の首領の娘である。

さらに 神秘的《the ^{ジャワー} Giant》* の中の ^{リーラ} Leila の 追憶に基いて 描かれてい
る。

(注)

《異端下道》 1813年。バイロン詩。

ジャウアは トルコ人が 非イスラム教徒、特にキリスト教徒を呼ぶ軽侮のことば
である。 女奴隷 リーラは主人の ハサンに貞節を守らなかったために、縛られ
て海中に投ぜられた。リーラの情人ジャウアは ハサンを殺害して恨みをはらすと
いう筋。

第四篇の ^{ガルベヤズ} Gulbeyaz と ^{ドゥードゥー} Dudo は 直載に バイロンのトルコの日日から記憶
をたどったもの、そして更に一方 最終篇の ^{アウロウラー} Aurora と ^{アダリーン} Adeline は 華やかな
ロンドンの寵児たりしころ名声の月日を描いたものである。

しかも ここでさへ、そして最初から 我々が意識するのは、この詩が〈夢〉と〈覚醒〉の両面で進行しつつある ということである。登場してくる女性群は 現実生活においてバイロンを取囲んだものたちであり、それがモデルとなっている。しかし 詩の中で 彼女らは 夢中歩行的に次々と現われては 走馬灯のぐるぐる廻る中で一つに交合し融け合っている。 Blake の句をかりれば

‘Weaving to Dreams the Sexual strife’

(性愛の葛藤が色々の夢の綾織となってゆく)

のである。実に Blake の

‘For the Sexes: The Gates of Paradise’

は バイロン詩の深奥面を解くための きわめて顕著な、かつ有用な鍵となるであろう。

〈Mutual Forgiveness of each vice〉*はバイロンが 妻アナベラに向けて反問した、あの怒りの情^{ところ}なのである。 Blake の〈水〉、〈大地〉、〈大空〉の構想はすべて entrapment 〈わなにしかけ、陥れること〉であり、最後の〈火〉の構想は——そこでは 人間の解放は〈果てしない闘争〉によってのみ達成、成就するのであるが——まさしく、この頃のバイロンの置かれた場、心境を伝えるものである。

(注)

* ‘The Gate of Paradise’ のプロローグの冒頭の句である。

† Blake, William (1757-1827) イギリスの詩人、画家。彫版術を生業とした。 Poetical Sketches 1783, Songs of Innocence 1789——自ら採飾した詩集——出版。

これらロマン豊かな敘情詩を貫く基調は、自然と人間の世界が 純真と愛にみちているということである。

The Marriage of Heaven and Hell (1790) になると、逆説的な表現を通して、一切の束縛を破壊する不羈奔放な力を肯定する態度が明らかになる。この權威に対する反抗の精神は The French Revolution (1791) や 性の自由を説く Visions of Daughters of Albion (1793) や アメリカ独立戦争をテーマとした America (1793) などに 一層、明確化する。有名な ‘Tiger! Tiger! burnig bright’ は Songs of Experience 中にある。

挿絵を版刻し 画家としての偉大さも示した。

その他の<^{表 象} emblems> の各が いずれも、その適切性をもつものであることが 示され得たのである。

ここで

No.7 ‘What are these? Alas! Female Martyr, Is she also the Divine Image?’

No.8 My Son! My son!

No.10 Help! Help!

No.16 ‘I have said to the Worm: Thou are my mother & sister’

のみを示すが、

この最後の emblem は結びの ‘The Keys of The Gates’ の次の詩行の中で拡大されている。

My Eternal Man set in Repose,
The Female from his darkness rose
And She found me beneath a Tree,
A Mandrake, & in her Veil hid me...

When weary Man enters his Cave

He meets his Saviour in the Grave
Some find a Female Garment there,
And some a Male, woven with care,

Lest the Sexual Garments sweet
Should grow a devouring Winding sheet,
One dies! Alas! the Living & Dead,
One is slain & One is fled...

Thou'rt my Mother from the Womb,
Wife, Sister, Daughter, to the Tomb,
Weaving to Dreams the Sexual strife
And weeping over the Web of Life.

永遠の男、われ、	憩につくとき
女が 暗黒より	立ち上る
樹下に、マンダラゲの下に	我を見つけ
そのヴェイルの中に	我をかくまう

疲れた男が	洞窟に入るとき
墓場の中で	救いの神 現れ
女性の衣裳を	あるときは
丹念に織られた	男の着物を見る

性愛の甘美な衣	もつれゆき
貪婪にからみあう	薄布とならぬ御用心
人は死ぬ。あゝ	生者も 死者も
人は殺され	けされゆく

揺籃より	墓場まで
わが母 わが妻	わが娘
性の葛藤なる	夢を織りなす
憂し世の絆の	もつれを歎く

＜The Gates of Paradise＞ は バイロンの出生時の身障による葛藤から永眠の地、ミソロンギ迄の、果しなく続いた己の心との闘い、渦巻、嵐、旋風を、解決した生涯のすべての模様を うす気味悪いほど見事に 適切に描き尽している。即ち それは亦、1816～19年の間（追放よりグイチョリー伯夫人 テレーザと イタリアで 愛の契りを結び 流謫の樂園に憩い ドン・ジュアン執筆への執念を燃やし続けたころまで）の 母、妻、姉、娘との直接 膚に感じたジレンマ—— 彼の手紙、や日記が例証する如く—— に焦点が当てられている。

もし 我々がドン・ジュアンの冒頭の節の中の愚弄、嘲笑の底流にある現実的表面を眺めるならば、この複雑性が存在しているのである。そして そこでは ドン・ジュアンの母 ^{ドナ イネス} Donna Inez はバイロンの母及び妻アナベラの混合された複雑な性格を備え、且つ、加えて ^{レディー カロライン ラム クレア} Lady Caroline Lamb と ^{クレア} Claire ^{クレアモント} Clairmont の性格からくる、いくつかの特色をも兼ね備えているのである。

Donna Julia も亦、Teresa と Augusta と Lady Frances Webster そして ^{リーラ} Leila ——《ジャウウ》（異端下道）の中の女奴隷でジャウアの情人。主人ハサンに貞節を守らなかったで、縛られて海中に投ぜられた バイロンの作品中の悲劇のヒロイン——の姿をも併せもつ女性である。

正に一つの夢さながらに、これら現実の生活に登場してくる女性群像が不思議な諸々の型に形成され、お互に、うろたえながら流れゆくのである。

これらは Blake が述べるのが常だった, Emanations (精神的感化力, 発散) である。即ち, 男まさりの古き型, つまり, Juan たる Zoa* —みずからは <Harold> の中に投影され, 又 <Manfred> の中である種の完成へともたらされた the universal man <普遍的人間> の分割された一片なのだが —その Emanation 発散である。 もっとも, バイロンにおける 3 分裂的力は最初から あまりにも強烈故に完全な統合体となることが出来なかったのだが。

(注)

Zoa は Zoon の pl <← Gr zōion animal> 類生物 (独立の運動能力をもつ生物体 または細胞。両性生殖によらず分裂, 増殖によって生じる独立個体)。

《Don Juan》が 《Childe Harold》の反転であると云はれるのは それが 絶えず母系制としての社会制度を提唱し続けた という点において 最も顕著である。

最初 から Blake の 'Shadowy Female' が その場をとりしきっていて 男性 — 女性が産んだ, 育てた, 教育した, そして女性に叱られる — は 常に女性の掌中にある蠟人形すぎないのである。

^{セビル} Seville は Garden, として Garden of 'oranges and women' — オレンジと女の園 — として 強引に 提示され 描かれている。そして 神学者達が Eden の園の範囲内で禁断の木の^{りんご}実としての林檎よりも むしろ ^{オレンジ} Orange を提案したのは, おそらく <バイロンの抱いた夢, 願^{こころ}, 情> の不在, 缺如の故 といってよいだろう。

それは兎も角 私達は ^{イネス ジュリア} Inez—Julia の関連において Lilith—Eve の神話の奇妙な re-enactment 再演を見るのである。そして太古の Adam としての Juan-

Jose—Alfonso は 彼の女性たちに関して困惑状態に置かれた^{カバリエール・セルバンテ}＜随身の騎士＞
の身分として＜彼の園＞の近くで ためらっている。 (cixxx)

Other echoes / Inhabit the garden.'

＜この園＞には 他のエコーも多くうかがえるのである

Donna Ines は 名の聞えた、学識豊かな貴婦人 'a learned lady' であり、
あらゆる科学の部門で有名なのである。 彼女の得意な科学は 数学であった。
一人の全面的 自覚主義者、……要するに 彼女は 'a walking calculation'
一人の＜生きた計算器＞だった。 (lx-xii)

彼女は 女性的というよりも むしろ 男性的特徴の持主であった。

他方 ^{ドン ホセ}Don José は

'A mortal of the careless kind... a man
Oft in the wrong, and never on his guard'

不注意で 集中力がなく
いつもドジをふみ 全く開放的

な男なのである。(xix-xxi)

そして、一人乃至二人は情人を囲っているとの噂があり、常習的、女房との
ゴタゴタ争いが続いている 申し開きに忙しい。

...she had a devil of a spirt,
And sometimes mixed up fancies with realities,

And let few opportunities escape

Of getting her liege lord into a scrape. (I, xx)

……ドナ・イネスは魔性の女

ときどき 現実と空想を 捏ねまぜては
やんどとな 貴ホセき領主 の良人を ギューといわせる
 機会を見逃すような ヘマは絶対やらぬ

バイロンの妻 Lady Byron (Annabella) アナベラが 最愛の夫 Lord Byron
 の悪徳を実証しようと生命をかけた——アナベラはバイロンと離別後も、さら
 に、バイロンの死後も、バイロンの生涯の悪徳を実証することを唯一の生き甲
 斐としたという——そのように、^{ドナ イネス} Donna Inez も

‘to prove her loving Lord was mad’

彼女の夫、愛する Lord 領主 ^{ドン ホセ} Don José が mad〈狂気、乱心者〉であ
 ることを実証しようと弁護士や侍医の間を奔走して 懸命な努力し、 そうで
 ないことが わかると

‘She next decided he was only bad’ (xxvii)

彼女は次に「ホセは 結局、^{わる}〈悪〉であり〈背徳者〉なのだ」と決断を下し

and is starting proceedings for divorce when Don Jose obligingly dies
 (xxxii).

そして離婚への手続きを取り始めようとしたとき ありがたいことに ホセ
 が死んだのである。

この不釣り合^{カップル}の夫婦の 一人息子 ^{ドン ジュアン} Don Juan は 父親 ^{ドン ホセ} Don José にその
 まま そっくりの性情、情念、氣質を承け継いでいた。つまり 勇気あり 精
 気に満ち 何事においても屈託なく 開けっ放しで 雅量あり寛大で まこと
 に人も羨やむ、美少年であった。そして、やがて若き女性にとって 垂涎、憧
 れの的となった。

At six, I said he was charming child
 At twelve he was a fine, but quiet boy;
 Although in infancy a little wild,
 They tamed him down amongst them: to destroy
 His natural spirit not in vain they toiled,
 At least it seemed so... (I, I)

前述の如く 6才で ジュリアン^{チャーミング}は魅力的 だった
 12才で 美しい だが静かな少年となった
^{おきなび}幼日の 腕白小僧も
 周囲の温情に守られ 教育され矯められ
 荒い仔馬が馴れたのは 結実したのだ
 みな^{おきなび}の労苦が 少くともそうみえたが……

(I, 1)

‘They’とは 勿論、ジュアンの母 ^{ドナ イネス} Donna Inez を中心とする女性群のこと
 で ジュアンの父 ^{ドン ホセ} Dan José の死後は ジュアンの教育をイネスや彼女の親
 友ドナ・ジュリア達 女性群が献身的に引受け 且つ その上、牧師や教師達
 がジュアンの周囲に付添って立派な教育を施した。ジュアンの母 ドナ・イ
 ネスは、そのような超一流の教育ママであり 一人息子の教育のために腐心し
 ジュアンは立派な教育を身につけ 宗教的に 情操的に 学問的にも 立派に
 育ってゆき 母親の苦勞に報いた。

Amongst her numerous acquaintance, all
 Selected for discretion and devotion,
 There was the Donna Julia, whom to call
 Pretty were but to give a feeble notion
 Of many charms in her as natural
 As sweetness to the flower, or salt to Ocean. (I, 1v)

ドナ・イネスを取巻く 数多の友人達は
 みな、思慮、分別、献身の 選り抜きで
 ドナ・ジュリアが、 その中にいたが
 可憐と呼ぶには あまりに か弱で
 彼女の生来の魅力は たとえれば
 花の香りのようであり 大洋の潮のようだった

(I. 1v)

この最後の詩行は 我々を ‘Acquaintance, all/ Selected for discretion and devotion’ (Donna Julia の周知の顔) の技功から 巧みに ‘nature’ つまり、花の甘美さ、大洋の塩の nature (自然) (性) (それは、以前の節の詩行に詩われた Donna Inez に帰せられる＜上品なしゃれ＞ the sal Atticum とは全くちがった) の危機地帯へと導いてゆくのである。

バイロンはここで、ジュアンのもって生れた宿命としての歩みに伴い、つきまとう複雑な身辺のそして彼にリンクする周辺の事情を 先ず 描いている。

そしてこの《ドン・ジュアン》の詩の展界について構想を提起し 投げかける。

ジュリアの東洋的明眸は＜彼女の曾祖母＞からのずっと受け継がれたムーア人的血の出生を物語っている。(1vi) 又、ジュアンの 次の恋のアバンチャー

ルの相手ハイディーは ムーア人的血の〈彼女の母〉から受継いでいる。
(IV, liv)。バイロンがこれら 東洋的 イスラム教徒的血に固執して美しい女
を描き続け 礼讃し続けるバイロンの全面的悪情嗜好、東洋的美女嗜好はバイ
ロン生涯の全作品のヒロインを通して一貫して変らない*。

(注)

Derived from 'her great great grand-mamma' (lvi); Haidée, in Juan's
next love adventure, has a Moorish mother (IV, liv). Byron's insistence on
these Eastern, Islamic ingredients is important for his whole doctrine of
love.

この点でバイロンは 地中海の両端での自らの体験をリンクさせ、この詩の
中で次々と繰り出される女性のヒロインを通じて、その構成要素を要約するこ
とになる〈女性の原型〉を^{ジュリア} Julia の中に溶けこませている。

^{イネス} Inez でさえ一見そうみえる程、哀歌的ではない。 ^{ジュリア} 彼女は Julia の夫、^{ドン} Don
^{アルフォンゾ} Alfonso とは（ジュリアとアルフォンゾとの）結婚前に既に罪を犯していたこ
とが ほのめかされている (lxvi)。

このアイディアは突然 現れて、この詩の解釈の現実性としては もっと
もらしくない不自然な面を露呈するかのようである。そしてさらに加えて芸術
的にみて不都合である。なぜなら、それは〈夢幻〉の面でのみ存在しそこでは
登場人物と主旋律、モチーフが、あいまいに 別方向に流れてゆくので バイ
ロンの無意識の、半ば無意識の〈強制〉〈無理押し〉であることが明白にな
ってくる。これらの間で我々は バイロンの〈憤怒の情〉を推察、測り知るこ
とができるのである。

Standing alone beside his desolate hearth,

Where all his household gods lay shivered round him (I, xxxvi)

寂^わびしい^{いろり}炉のそばに ぽつねんと彼は立ち、
この家の守護神らが 彼を囲んで寒々と震える

それは バイロンの、（ジュアンの）憤怒^{こころ}の情なのである。

それは、‘有徳面した’女性群が 彼に対して行った仕打ちに対する激怒であつた。さらに、その激怒の情に対して湧き起つた復讐心への渴きへと変りゆくのであつた。——それは、この時期（バイロンの追放時 1816年）の彼の多くの手紙の中で述べられているが——。

そして亦、この詩行の中に、もっと深い趣旨をも 汲みとることもできよう。

即ち、人間界におけること、人事と人間の特質全ての相関関係についてのバイロンの形而上学（純粹哲学）の主題、モチーフであり、これが≪Don^{ドン} Juan^{ジュアン}≫ の 名篇長詩の根本的テーマなのである。

Donna Inez が、 Mrs Byron が、 Annabella が、現実的には 不貞であつたか否かは＜人間性について組込まれている反対テーゼ＞ とは無関係なのである。

それは ^愛 Love が＜純粹＞なものか＜不純＞なものか、＜利己的＞ものか＜非利己的＞なものか、＜プラトニック＞なものか＜肉感的＞なものか否かが 人間性の本質的罪惡に無関係であるのと全く同一である。

というのは guilt 罪、 original sin 原罪は すべての人間の行動を墮落させ、且つ、如何なる分野でも＜肉欲的＞なもの程、より明瞭なものはあり得ないのである。

^{ハイディー} Haidee のエピソードを論じるにあたり、この点こそ 我々が 帰着したい到達点 即ち 原点なのである。しかも ここで、このことを 心に銘記することこそ 最も肝要なことであらう。

‘What might have been and what has been/Point to one end, which
is always present.’

そうだったかもしれぬもの

そうであった もの

一つの端を 示せ

それは 常に存在するのだ

ジュアンとジュリアは 不可避免的に恋におちこの詩の ^{こっけい}comic な ^{官能的}erotic な
行動が 力強く活力にみちて展界し始める。

《Don Juan》 第一編の爾餘の部分は専ら 美しい姦通の條^{くだり}に終始している。

——（続、次号へ）——

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.